

令和七年度 一般選抜(前期日程) 国語(経済学部経済工学科) 標準解答例

大問1

問1 インタビューセッションをしていると、相手が共感をあてにして、聞き手の同意を取り付けるためにさまざまなテクニックを無自覚に用いるようになるので、聞き手が「!?」の声音で応えることによって、そうした共感への期待に応じることなく、また、良し悪しなどのジャッジもせずに、淡々と話を聞くようにしているということ。

問2 ドラマティックな語りにも淡白な語りにも、ある種の演技や技巧が潜んでいて、どちらの場合も、語る人の感情の揺れや身体に馴染んでいない声が「音のズレ」として感じられる点で、著書の気になるところが共通するということ。

問3 何が手に入るのかと質問することで、共感への期待や同意を取り付けようとする意図、話す際の演技といった技巧を相手に気づかせることができるため。

問4 何を失ってしまうのかと質問することで、切実に聞いてほしい願いとは、共感では届かない深いところの自覚されない訴えであると相手に気づかせるため。

問5 都会に住む人々のいう繊細さは、言葉によって権力関係を競い駆け引きを行うためのもので、そうした感性には、人間も自然の一部であり、誰しも自分の思いのままにはならない存在だという謙虚さが無いということ。

問6 「完全に聞く」とは、話す相手が共感や承認(同意)を求めて強調する「意味」を受け取らず、ただその人の身体の状態、ありのままの姿を受け止め、また、傲慢にも相手の話を要約したり、解釈したり、善悪や正誤の判断をせず、「その人の話をその人の話として聞く」ことを通して、相手の隠された意図や、自覚されない訴えに到達しようとする状態のこと。

大問2

問1 資本主義がこのままでは立ち行かなくなるという認識が広がる背後で、資源の枯渇や環境危機、金融資本の拡大とその不安定性から、無限の経済成長を前提あるいは目的とする資本主義の持続可能性が問題となっているということ。

問2 19～20世紀以前と以降との間に不連続な地質学的変化が刻まれているだけでなく、それは人間活動が広範で激しくなったために生じたのであって、人間自身が、地質学的エージェントとして、地球環境において支配的な存在となったことを示しているから。

問3 人間の活動が広範で激しくなったことで、地球規模で自然が破壊され生態系の均衡が崩れれば、人間の生存の条件が脅かされることとなり、人間が利用している自然は有限であることが、全人類に思い知らされるということ。

問4 近代においては、世界を創り出す主体としての人間と、人間に素材や道具として用いられる客体としてのモノが本質的に区別されるようになったことで、人間が地球を、探索、分類、開発する客体とみなして、自然を無限に与えられたもののようにふるまうようになったということ。

問5 (例) 海洋水域に、領海や排他的経済水域などの沿岸国の権利を設定したことを例にとれば、生存条件として人間の在り方を規定する存在である地球の表面積70%を占める海洋を、ヒトが領有し利用する存在に転換したということ。

問6 近代法における所有権は、人格の本質を意思に見出すという哲学的前提のもとで、人間を抽象的な権利義務の帰属主体と捉え、客体となるヒト以外の具体的なモノとを区別する法的思考の枠組みに基づいているから。